

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11) 特許出願公開番号
特開2002-138010
(P2002-138010A)

(43) 公開日 平成14年5月14日 (2002.5.14)

(51) Int.Cl. ⁷	識別記号	F I	テーマコード* (参考)
A 6 1 K	7/00	A 6 1 K	7/00
	7/02		7/02
	7/021		7/021
	7/025		7/025
	7/027		7/027
審査請求 未請求 請求項の数 3 O L (全 8 頁) 最終頁に続く			
(21) 出願番号	特願2000-333159 (P2000-333159)		(71) 出願人 000004008
(22) 出願日	平成12年10月31日 (2000. 10. 31)		日本板硝子株式会社
			大阪府大阪市中央区北浜四丁目7番28号
			(72) 発明者 横井 浩司
			大阪府大阪市中央区道修町3丁目5番11号
			日本板硝子株式会社内
			(74) 代理人 100069084
			弁理士 大野 精市
			最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 化粧料

(57) 【要約】

【課題】 ラメ剤の粒子径が大きくても、肌などへの付着性がよく、化学的に安定で、かつ、色彩が均一で高い光輝感を呈する化粧料を安価に提供する。

【解決手段】 金属で被覆された薄片状ガラスを含有する化粧料。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 金属で被覆された薄片状ガラスを含有する化粧料。

【請求項2】 上記薄片状ガラスは、平均厚さ0.3～8 μ m、平均粒径5～5,000 μ mである請求項1に記載の化粧料。

【請求項3】 上記薄片状ガラスは、被覆金属が銀、金、ニッケルおよびハステロイからなる群より選ばれた少なくとも1種である請求項1または2に記載の化粧料。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】この発明は、薄片状ガラスを含有するメイクアップ用の化粧料に関する。

【0002】

【従来の技術】メイクアップ用の化粧料は、爪、目元もしくは唇に塗布することにより、その部分に色彩を付与し、また質感を変える化粧料である。近年では、キラキラと輝く質感が好まれる傾向にあり、ラメ剤を含有する化粧料の需要が増大している。このようなラメ剤には、ポリエチレンフィルムにアルミニウムを蒸着した微細積層末、ポリエチレンテレフタレートフィルムにアルミニウムを蒸着しさらにエポキシ樹脂を被膜した積層末、アクリル樹脂被覆アルミニウム末、ポリエチレンフィルムとポリオレフィンフィルムの微細な積層末、パールマイカまたは金属酸化物で被覆された薄片状ガラスなどが利用されている。あるいは、細かい溝を有するポリエチレンテレフタレートフィルムにアルミニウムを蒸着し、さらにエポキシ樹脂で被覆した積層末も開発されている。この細かい溝を有する積層末は、化粧料に立体感を付与することができる。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、従来のラメ剤は爪や肌均一に付着し難く、化粧ムラが生じ易いという欠点があった。さらに、ラメ剤の粒子が大きくなると肌などへの付着性が低下し、とくにネイルエナメルなどの爪化粧料やマスカラなどの睫毛化粧料では1回の塗布では所望の光輝感が得られないため、重ね塗りが必須であった。

【0004】また、被覆金属がアルミニウムの場合は、水に溶解しないように、ラメ剤をエポキシ樹脂でさらに被覆する必要があり、製造コストが上昇すると共に、輝度が低下する問題があった。

【0005】さらに、パールマイカ（二酸化チタンで被覆された雲母片）や金属酸化物で被覆された薄片状ガラスの場合は、被膜である金属酸化物が透明であるため、ラメ剤に色彩を付与するには、反射光の干渉作用を利用しなければならなかった。そのため、反射光が弱くなり、ラメ剤として十分な光輝感が得られなかった。さらに、この場合は、被膜の厚さにより色彩が異なるため、

ラメ剤の各粒子の色彩が微妙に違っていった。

【0006】この発明は、以上のような問題点に着目してなされたものである。その目的とするところは、ラメ剤の粒子径が大きくても、肌などへの付着性がよく、化学的に安定で、かつ、色彩が均一で高い光輝感を呈する化粧料を安価に提供することにある。

【0007】

【課題を解決するための手段】上記の問題を解決するために、請求項1に記載の発明の化粧料は、金属で被覆された薄片状ガラスを含有するものである。

【0008】請求項2に記載の発明の化粧料は、請求項1に記載の発明において、薄片状ガラスが平均厚さ0.3～8 μ m、平均粒径5～5,000 μ mであるものである。

【0009】請求項3に記載の発明の化粧料は、請求項1または2に記載の発明において、薄片状ガラスの被覆金属が銀、金、ニッケルおよびハステロイからなる群より選ばれた少なくとも1種であるものである。

【0010】

【発明の実施の形態】以下、この発明の実施の形態について、詳細に説明する。なお、この実施の形態に限定するものではない。

【0011】この化粧料は、ラメ剤として金属で被覆した薄片状ガラス（以下、単に「薄片状ガラス」と称す）を使用する。この薄片状ガラスは、被膜が金属であることから、外観上有彩色の金属光沢を呈するものである。また、干渉作用を利用しないことから、反射光が弱まることなく、かつ、各粒子毎に色彩が微妙に異なることもない。さらに、基材がガラスであるので、パールマイカのような劈開性がなく、化粧料の混練時に粒径が小さくなってラメ剤としての光輝感が損なわれることもない。薄片状ガラスは、その表面が極めて平滑であることから、化粧料中での流動性が高く、肌などへの付着性および密着性に優れ、重ね塗りの必要がなくなり、化粧落ちも生じ難くなるなど優れた機能を発揮する。

【0012】この薄片状ガラスの大きさは、使用性、使用感または化粧効果によって適宜選択されるが、平均粒径5～5,000 μ mが好ましく、さらには10～1,000 μ mが好適である。平均粒径5,000 μ mほどの大きさであっても、薄片状ガラスは、その表面平滑性故に化粧料中で十分に流動でき、かつ、肌への付着性と密着性に優れる。そのため、この化粧料を使用すれば、重ね塗りをしなくても十分な光輝感が得られる。また、化粧部分に質感が必要な場合は、粒径の大きめのものが適しており、一方カバー力が必要な場合は、小さめのものが好適である。なお、粒径の異なる薄片状ガラスを混合して使用してもよい。

【0013】薄片状ガラスの厚さは、肌や爪への付着性および化粧料への配合安定性の点で、平均厚さ0.3～8 μ mが好ましい。ちなみに、一般的なパールマイカの

平均厚さは0.3 μm 程度である。パールマイカは、薄片状ガラスほど表面平滑性が高くないため、厚さが増すと化粧料中での流動性が低下する。また、パールマイカはその劈開性のため、0.3 μm 程度では化粧料の混練時に大半が破損してしまう。

【0014】薄片状ガラスの被膜は、銀、金、ニッケルまたはハステロイが好ましい。これらは化学的に安定で水と接触しても溶解しないので、これら金属の被膜であれば、従来アルミニウム被膜上に必須であった樹脂コーティングが不要である。また、これら金属は高級感のある有彩色を呈するので、化粧料材料として好適である。

【0015】このような薄片状ガラスとして、たとえば銀を被覆したメタシャインPSシリーズ（日本板硝子社製 メタシャインRCFSX5480PSまたはREFSX-2015PSなど）、金を被覆したメタシャインGGシリーズ（日本板硝子社製 メタシャインRCFSX-5150GG）、ニッケルを被覆したメタシャインNSシリーズまたはNBシリーズ（日本板硝子社製 メタシャインRCFSX-5230NSまたはRCFSX-5090NBなど）、あるいはハステロイを被覆したクリスタルスター（東洋アルミニウム社製 クリスタルスターGF2525）が挙げられる。必要に応じて、これらを二種以上を組み合わせてもよく、またこれらの金属被膜をさらにシリカ、一般油剤、シリコン油、フッ素化合物または界面活性剤で表面処理してもよい。

【0016】この化粧料は、従来からラメ剤を含有する化粧料であれば、その種類をとくに限定されない。たとえば、ネイルカラーやネイルコートなどの爪化粧料、アイシャドウ、アイライナー、マスカラまたは眉墨などの眉目化粧料、ファンデーション、頬紅、フェースカラー、口紅、リップグロス、アイライナーペンシルやリップライナーペンシルなどのペンシル状のメイクアップ化粧料、水や溶剤にラメ剤を沈降させた状態で配合し使用時に適度に振り混ぜて使用するような沈降タイプのメイクアップ化粧料などが挙げられる。

【0017】化粧料における薄片状ガラスの含有率は、0.1～100重量%（以下、単に「%」とする）である必要がある。化粧料の剤形によって、ラメ剤の含有率は一般に決まっているが、従前の含有率に限定されるものではない。以下、各剤形におけるこの薄片状ガラスの好ましい含有率を列挙する。

【0018】ネイルカラーなどの爪化粧料では、0.1～50%、さらには3～40%が好ましい。0.1%未満では、ラメ剤としての効果が乏しくなる場合があり、50%を越えると塗布性が悪くなる場合がある。

【0019】粉末をプレスなどにより乾式充填し、または粉末を揮発性溶剤を用いて湿式充填し乾燥させて得られるアイシャドウ、あるいは頬紅などの固形粉末化粧料の場合は、5～80%が好ましく、さらには10～60%が好適である。この範囲であれば、ラメ剤の光輝感が発揮され易く、しかも使用性が良好である。

【0020】ルースパウダーとして使用するアイシャドウ、フェースカラーなどの粉末状化粧料の場合は、使用時に肌上に存在する人脂と混ざるため、100%でもよい。

【0021】口紅や油性アイシャドウなどの油性固形化粧料の場合は、1～60%が好ましく、3～50%がさらに好ましい。1%未満ではラメ剤としての効果が乏しくなり、一方60%を越えると高温下での流動性が悪くなり、成型性の点で好ましくない。

【0022】水相と油相を活性剤で乳化して得られる乳化型メイクアップ化粧料の場合は、1～50%が好ましく、3～40%がさらに好ましい。1%未満ではラメ剤としての効果が乏しく、一方50%を越えると乳化が不安定になり易い。

【0023】水に水溶性樹脂、水性樹脂エマルションもしくは増粘剤などを配合してなる水性マスカラまたは水性ジェルなどの水系メイクアップ化粧料の場合は、0.1～60%が好ましく、1～40%がさらに好ましい。0.1%未満ではラメ剤としての効果が乏しく、一方60%を越えると使用上好ましくない。

【0024】この化粧料は、薄片状ガラス以外に化粧材料として従来から使用されているものを適宜選択して含有することができる。たとえば、固形油としては、ポリエチレンワックス、エチレンプロピレンコポリマー、固形パラフィンワックス、セレンシンワックス、マイクロクリスタリンワックス、フィッシュアトロブシワックスもしくはモンタンワックスなどの炭化水素類、カルナウバワックス、キャンデリラワックス、ビーズワックス、モクロウもしくはゲイロウなどのロウ類、カカオ脂、パーム油もしくは牛脂などの油脂類、ステアリン酸、ラウリン酸、ミリスチン酸もしくはベヘニン酸などの高級脂肪酸類、セチルアルコール、ステアリルアルコール、ラウリルアルコールもしくはベヘニルアルコールなどの高級アルコール類、水添ヤシ油もしくは硬化ヒマシ油などの硬化油類、ステアリン酸メチル、パルミチン酸セチル、ロジン酸ペンタエリトリットエステルもしくはジステアリン酸プロピレングリコールなどのエステル類、またはステアリル変性ポリシロキサンもしくはベヘニル変性ポリシロキサンなどのシリコンワックス類などが挙げられる。また、これらを二種以上併用してもよい。

【0025】液状油としては、動物油、植物油もしくは合成油などの起源を問わず、炭化水素類、油脂類、硬化油類、エステル油類、脂肪酸類、高級アルコール類、シリコン油類、フッ素系油類、ラノリン誘導体類、油性ゲル化剤類、親油性界面活性剤類または油溶性紫外線吸収剤類などが挙げられる。具体的には、流動パラフィン、スクワラン、ワセリン、ポリイソブチレン、ポリブテンなどの炭化水素類、オリーブ油、ヒマシ油、ホホバ油、ミンク油もしくはマカデミアンナッツ油などの油脂類、セチルイソオクタネート、ミリスチン酸イソプロピ

ル、パルミチン酸イソプロピル、ミリスチン酸オクチルドデシル、トリオクタン酸グリセリル、ジイソステアリン酸ジグリセリル、トリイソステアリン酸ジグリセリル、トリベヘン酸グリセリル、ロジン酸ペンタエリトリットエステル、ジオクタン酸ネオペンチルグリコール、コレステロール脂肪酸エステルもしくはN-ラウロイル-L-グルタミン酸ジ(コレステリル・ベヘニル・オクチルドデシル)などのエステル類、イソステアリン酸もしくはオレイン酸などの脂肪酸類、オレイルアルコールもしくはイソステアリルアルコールなどの高級アルコール類、低重合度ジメチルポリシロキサン、高重合度ジメチルポリシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン、デカメチルシクロペンタシロキサン、オクタメチルシクロテトラシロキサン、ポリエーテル変性ポリシロキサン、架橋型オルガノポリシロキサンもしくはフッ素変性シリコンなどのシリコン類、パーフルオロポリエーテル、パーフルオロデカンもしくはパーフルオロオクタンなどのフッ素系油剤類、酢酸ラノリン、ラノリン脂肪酸イソプロピル、ラノリンアルコール等のラノリン誘導体、デキストリン脂肪酸エステル、蔗糖脂肪酸エステル、デンアン脂肪酸エステル、1,2-ヒドロキシステアリン酸アルミニウムもしくはステアリン酸カルシウムなどの油性ゲル化剤類、またはパラアミノ安息香酸エチル、p-メトキシケイ皮酸-2-エチルヘキシル、4-tert-ブチル-4'-メトキシジベンゾイルメタンもしくはオキシベンゾンなどの油溶性紫外線吸収剤類などが挙げられる。また、これらを二種以上併用してもよい。

【0026】また、粉体を含有してもよく、その粉体は、球状、板状もしくは針状などの形状、微粒子、顔料級などの粒子径、多孔質または無孔質の粒子構造などについて、とくに限定されない。たとえば、無機粉体類、光輝性粉体類、有機粉体類、色素粉体類または複合粉体類などが挙げられる。具体的には、酸化チタン、黒酸化チタン、コンジョウ、群青、ベンガラ、黄酸化鉄、黒酸化鉄、酸化亜鉛、酸化アルミニウム、酸化マグネシウム、酸化ジルコニウム、炭酸マグネシウム、炭酸カルシウム、酸化クロム、水酸化クロム、カーボンブラック、ケイ酸アルミニウム、ケイ酸マグネシウム、ケイ酸アルミニウムマグネシウム、マイカ、合成マイカ、合成セリサイト、セリサイト、タルク、カオリン、無水ケイ酸、シリカビーズ、炭化ケイ素、硫酸バリウム、ベントナイト、スメクタイトもしくは窒化硼素などの無機粉体類、オキシ塩化ビスマス、雲母チタン、酸化鉄コーティング雲母、酸化鉄雲母チタン、有機顔料処理雲母チタンもしくはアルミニウムパウダーなどの光輝性粉体類、ナイロ

ンパウダー、ポリメチルメタクリレート、アクリロニトリル-メタクリル酸共重合体パウダー、塩化ビニリデン-メタクリル酸共重合体パウダー、ポリスチレンパウダー、ポリメチルシルセスキオキサンパウダー、オルガノポリシロキサンエラストマーパウダー、ウレタンパウダー、ウールパウダー、シルクパウダー、結晶セルロースもしくはN-アシルリジンなどの有機粉体類、有機タール系顔料もしくは有機色素のレーキ顔料などの色素粉体類、または微粒子酸化チタン被覆雲母チタン、微粒子酸化亜鉛被覆雲母チタン、硫酸バリウム被覆雲母チタン、酸化チタン含有二酸化ケイ素もしくは酸化亜鉛含有二酸化ケイ素の複合粉体などが挙げられる。また、これらを二種以上併用してもよく、金属酸化物、金属水酸化物、フッ素化合物、シリコン系油剤、金属石鹸、ロウ、油脂または炭化水素などでさらに表面処理してもよい。

【0027】さらに、界面活性剤、酸化防止剤、香料、防腐剤、水、グリセリンや1,3-ブチレングリコールなどの多価アルコール、低級アルコールまたは美容成分などを含有してもよい。

【0028】この化粧料は、薄片状ガラスと上述の各種材料とを、公知の手段により配合、混練および成形することにより製造される。

【0029】

【実施例】以下、実施例により、この発明をさらに具体的に説明する。

【0030】(実施例1~3)および(比較例1~3):口紅

下記「表1」の材料1~5を均一に溶解混合した後、材料6~9を添加してローラーミルで混練し、これらを均一に拡散させた。その後、材料10~13を添加し均一分散させ脱泡した。そして、金型で成型し所定の容器に装填して、スティック形状の口紅を得た。この口紅について、ラメ剤の均一な付着性、ラメ剤の光沢感および総合的な化粧効果を下記の方法で評価した。

【0031】〈評価方法〉この口紅を女性パネラー20名に実際に使用してもらい、使用特性(ラメ剤の均一な付着性、ラメ剤の光沢感および総合的な化粧効果)について官能的に評価してもらった。下記「表1」には、この官能試験の結果をつぎの記号で示す。

◎ : 良いと答えた人数が15人以上
○ : " 10~14人
△ : " 7~10人
× : " 6人以下

【0032】

【表1】

口紅

	材料名	実施 例 1	実施 例 2	実施 例 3	比較 例 1	比較 例 2	比較 例 3
1	パラフィン	12.0	12.0	12.0	12.0	12.0	12.0
2	マイクロクリスタリンワックス	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0
3	水素添加ポリブテン	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0
4	オクチルドデカノール	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0
5	トリ(カプリル・カンリン酸)グリセリン	適量	適量	適量	適量	適量	適量
6	赤色202号	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
7	黄色4号アルミニウムレーキ	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
8	硫酸バリウム	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
9	酸化チタン	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
10	銀被覆薄片状ガラス末(注1)	1.0	—	—	—	—	—
11	銀被覆薄片状ガラス末(注2)	—	3.0	10.0	—	—	—
12	PET/A1/エポキシ積層末(注3)	—	—	—	3.0	10.0	—
13	PET/A1/エポキシ積層末(注4)	—	—	—	—	—	10.0
ラメ剤の均一な付着性		○	◎	◎	×	×	×
ラメ剤の光沢感		◎	◎	◎	×	△	△
化粧効果		○	◎	◎	×	△	△

注1:メタシャインRCFSX-5140PS

(平均粒径 $140 \pm 45 \mu\text{m}$ 、平均厚み $5 \pm 2 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

注2:メタシャインREFSX-2025PS

(平均粒径 $25 \pm 10 \mu\text{m}$ 、平均厚み $2 \pm 1 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

注3:DCグリッターシルバーC(0.005)(ダイヤケムコ社製)

注4:ダイヤホログラムHG20EP(ダイヤ工業社製)

【0033】(実施例4～7)および(比較例4～5):ネイルカラー

下記「表2」の材料1～4および材料9～10をローラーミルで混練した後、材料5～8を添加し溶融拡散させた。さらに、材料11～15を添加し均一分散させ、所

定の容器に充填してネイルカラーを得た。このネイルカラーについて、実施例1と同様の方法で評価した。その結果を下記「表2」に併せて示す。

【0034】

【表2】

ネイルカラー

	材料名	実施 例 4	実施 例 5	実施 例 6	実施 例 7	比較 例 4	比較 例 5
1	ニトセルローズ	18.0	18.0	18.0	18.0	18.0	18.0
2	トルエンスルホンアミド樹脂	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0
3	クエン酸アセチルトリブチル	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0
4	アクリル酸アルキル共重合体	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
5	イソプロパノール	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
6	ベンジルジメチルアンモニウムヘクトライト	—	—	—	—	—	—
7	酢酸エチル	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0
8	酢酸ブチル	適量	適量	適量	適量	適量	適量
9	赤色202号	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
10	コンジョウ	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
11	銀被覆薄片状ガラス末(注5)	1.0	10.0	—	10.0	—	—
12	銀被覆薄片状ガラス末(注6)	—	—	20.0	—	—	—
13	銀被覆薄片状ガラス末(注7)	—	—	—	10.0	—	—
14	PET/A1/エポキシ積層末(注3)	—	—	—	—	20.0	—
15	PET/A1/エポキシ積層末(注4)	—	—	—	—	—	20.0
ラメ剤の均一な付着性		○	◎	◎	◎	×	×
ラメ剤の光沢感		◎	◎	◎	◎	△	△
化粧効果		○	◎	◎	◎	△	△

注5:メタシャインRCFSX-5480PS

(平均粒径 $480 \pm 145 \mu\text{m}$ 、平均厚み $5 \pm 2 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

注6:メタシャインRCFSX-5090PS02

(平均粒径 $90 \pm 30 \mu\text{m}$ 、平均厚み $5 \pm 2 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

注7:メタシャインREFSX-2015PS

(平均粒径 $15 \pm 5 \mu\text{m}$ 、平均厚み $2 \pm 1 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

注3:DCグリッターシルバーC(0.005)(ダイヤケムコ社製)

注4:ダイヤホログラムHG20EP(ダイヤ工業社製)

【0035】(実施例8～10)および(比較例6～8):パウダーアイシャドウ

下記「表3」の材料1～9をミキサーで均一に混合撹拌した後、約70℃に昇温して溶融させ、ここに材料10～13を添加して均一分散させた。室温にまで冷却し

た後、ミキサーに投入して再度均一に混合撹拌し、さらに材料14～16を投入して混合撹拌して、所定の金皿にプレス成形してパウダーアイシャドウを得た。このパウダーアイシャドウについて、実施例1と同様の方法で評価した。その結果を、下記「表3」に併せて示す。

【0036】

【表3】

パウダーアイシャドウ

	材料名	実施例 8	実施例 9	実施例 10	比較例 6	比較例 7	比較例 8
1	タルク	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0
2	マイカ	適量	適量	適量	適量	適量	適量
3	ナイロン末	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
4	硫酸バリウム	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0
5	赤色226号	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
6	ベンガラ	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
7	黄酸化鉄	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
8	グンジョウ	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
9	酸化チタン	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
10	メチルフェニルポリシロキサン	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
11	オクチルドデカノール	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
12	ワセリン	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
13	銀被覆ガラス末 (注2)	20.0	—	—	—	—	—
14	銀被覆ガラス末 (注7)	—	10.0	40.0	—	—	—
15	PET/A1/エポキシ親膚末 (注8)	—	—	—	20.0	40.0	—
16	PET/A1/エポキシ親膚末 (注9)	—	—	—	—	—	40.0
ラメ剤の均一な付着性		◎	◎	◎	×	×	×
ラメ剤の光沢感		◎	◎	◎	×	△	△
化粧効果		◎	○	◎	×	△	○

注2:メタシャインRCFSX-2025PS

(平均粒径 $2.5 \pm 1.0 \mu\text{m}$ 、平均厚み $2 \pm 1 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

注7:メタシャインRCFSX-2015PS

(平均粒径 $1.5 \pm 0.5 \mu\text{m}$ 、平均厚み $2 \pm 1 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

注8:DCグリッターシルバーC (0.001) (ダイヤケムコ社製)

注9:ダイヤホログラムHG5EP (ダイヤ工業社製)

【0037】(実施例11~13)および(比較例9):乳化型アイシャドウ
 下記「表4」の材料からなる乳化型アイシャドウを公知の手段により製造した。この乳化型アイシャドウについて、

実施例1と同様の方法で評価した。その結果を、下記「表4」に併せて示す。

【0038】

【表4】

乳化型アイシャドウ

	材料名	実施例 11	実施例 12	実施例 13	比較例 9
1	ステアリン酸	3.0	3.0	3.0	3.0
2	セチルアルコール	2.5	2.5	2.5	2.5
3	イソオクタン酸イソノニル	3.0	3.0	3.0	3.0
4	防腐剤	0.5	0.5	0.5	0.5
5	プロピレングリコール	3.0	3.0	3.0	3.0
6	トリエタノールアミン	1.5	1.5	1.5	1.5
7	ヒドロキシエチルセルロース	0.5	0.5	0.5	0.5
8	精製水	適量	適量	適量	適量
9	酸化チタン	1.0	1.0	1.0	1.0
10	グンジョウ	1.0	1.0	1.0	1.0
11	雲母チタン	8.0	8.0	8.0	8.0
12	タルシ	2.0	2.0	2.0	2.0
13	金被覆薄片状ガラス末 (注10)	3.0	—	—	—
14	銀被覆薄片状ガラス末 (注2)	—	10.0	—	—
15	ニッケル被覆薄片状ガラス末 (注11)	—	—	20.0	—
16	パールマイカ (注12)	—	—	—	20.0
ラメ剤の均一な付着性		◎	◎	◎	×
ラメ剤の光沢感		◎	◎	◎	△
化粧効果		◎	○	◎	△

注10:メタシャインRCFSX-5090GG

(平均粒径 $9.0 \pm 3.0 \mu\text{m}$ 、平均厚み $5 \pm 2 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

注2:メタシャインR4PSX-2025PS

(平均粒径 $2.5 \pm 1.0 \mu\text{m}$ 、平均厚み $2 \pm 1 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

注11:メタシャインRCFSX-5090NS

(平均粒径 $9.0 \pm 3.0 \mu\text{m}$ 、平均厚み $5 \pm 2 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

注12:イリオジン100 (メルク社製)

(粒径 $10 \sim 60 \mu\text{m}$ 、平均厚み $0.4 \mu\text{m}$)

【0039】(実施例14~16)および(比較例10):水性マスカラ

下記「表5」の材料からなる水性マスカラを公知の手段により製造した。この水性マスカラについて、実施例1

と同様の方法で評価した。その結果を、下記「表5」に併せて示す。

【0040】
【表5】

水性マスカラ

	材料名	実施例 14	実施例 15	実施例 16	比較例 10
1	ポリビニルアルコール	10.0	2.0	2.0	10.0
2	カルボキシビニルポリマー	0.5	—	—	0.5
3	アシル酸アルキル共重合体エマルション (固形分40%)	—	—	—	—
4	ヒドロキシプロピルセルロース	—	2.0	3.0	—
5	1,3-ブチレングリコール	5.0	—	3.0	5.0
6	プロピレングリコール	—	2.0	—	—
7	トリエタノールアミン	0.6	—	—	0.6
8	エタノール	5.0	—	—	5.0
9	防腐剤	0.2	0.2	0.2	0.2
10	精製水	適量	適量	適量	適量
11	銀被覆ガラス末 (注6)	8.0	—	5.0	—
12	銀被覆ガラス末 (注7)	—	10.0	8.0	—
13	酸化チタン被覆ガラス末 (注13)	—	—	—	8.0
ラメ剤の均一な付着性		◎	◎	◎	○
ラメ剤の光沢感		◎	◎	◎	△
化粧効果		◎	○	◎	○

注6：メタシャインRCFSX-5090PS02

(平均粒径 $90 \pm 30 \mu\text{m}$ 、平均厚み $5 \pm 2 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

注7：メタシャインREFSX-2015PS

(平均粒径 $15 \pm 5 \mu\text{m}$ 、平均厚み $2 \pm 1 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

注13：メタシャインRCFSX-1080RS

(平均粒径 $80 \pm 30 \mu\text{m}$ 、平均厚み $1.5 \pm 1 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

【0041】(実施例17～18)および(比較例1)：リップグロス
下記「表6」の材料からなるリップグロスを公知の手段により製造した。このリップグロスについて、実施例1

と同様の方法で評価した。その結果を、下記「表6」に併せて示す。

【0042】
【表6】

リップグロス

	材料名	実施例 17	実施例 18	比較例 11
1	パルミチン酸デキストリン	3.0	3.0	3.0
2	重質流動イソパラフィン	適量	適量	適量
3	イソオクタノールイソノニル	10.0	3.0	3.0
4	スクワラン	5.0	0.5	0.5
5	赤色201号	0.1	3.0	3.0
6	グンジョウピンク	0.5	1.5	1.5
7	硫酸バリウム	0.1	0.5	0.5
8	銀蒸着ガラス末 (注6)	8.0	—	—
9	銀蒸着ガラス末 (注7)	—	10.0	—
10	PET/Al/エポキシ被覆末 (注9)	—	—	10.0
ラメ剤の均一な付着性		◎	◎	×
ラメ剤の光沢感		◎	◎	△
化粧効果		◎	◎	△

注6：メタシャインRCFSX-5090PS02

(平均粒径 $90 \pm 30 \mu\text{m}$ 、平均厚み $5 \pm 2 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

注7：メタシャインREFSX-2015PS

(平均粒径 $15 \pm 5 \mu\text{m}$ 、平均厚み $2 \pm 1 \mu\text{m}$) (日本板硝子社製)

注9：ダイヤホログラムHG5EP (ダイヤ工業社製)

【0043】

【発明の効果】この発明は、上記のように構成されることから、つぎの効果を奏する。請求項1の発明の化粧料によれば、金属で被覆された薄片状ガラスを含有するので、キラキラとした有彩色の高い光輝感を呈する化粧効果が得られる。

【0044】請求項2の発明の化粧料によれば、請求項

1の発明の効果に加えて、薄片状ガラスが平均厚さ $0.3 \sim 8 \mu\text{m}$ 、平均粒径 $5 \sim 5,000 \mu\text{m}$ であるので、薄片状ガラスがラメ剤としてより有効に機能することができる。

【0045】請求項3の発明の化粧料によれば、請求項1または2の発明の効果に加えて、薄片状ガラスの被覆金属が銀、金、ニッケルおよびハステロイからなる群よ

選ばれた少なくとも1種であるので、これら金属特有の高級感のある化粧効果が得られる。

フロントページの続き

(51)Int.Cl. ⁷	識別記号	F I	(参考)
A 6 1 K	7/043	A 6 1 K	7/043

Fターム(参考) 4C083 AB232 AB242 AB362 AB432
AB442 AB501 AB502 AC012
AC022 AC072 AC102 AC122
AC242 AC342 AC352 AC372
AC422 AC542 AC692 AC792
AC852 AC862 AD022 AD072
AD092 AD112 AD152 AD242
AD262 AD282 BB25 BB26
CC01 CC11 CC13 CC14 CC28
DD04 DD11 DD17 DD23 DD27
DD28 DD31 EE01 EE06 EE07
FF05 FF06